



一貫コース通信

物事のはんぶん

令和 5 年も残り一月を切り年の瀬に向かっている。一年を振り返る訳ではないが、令和 5 年の中で話題になり気になったテーマに対し私見を述べてみたい。それは理系女子、近年で言うリケジョの事である。少なくとも新聞各社が扱った教育関連の話題に、日本に於ける女性の理系に占める割合が数多く取沙汰された。何でも OECD 諸国の中でも際立って低率であるとか、先進諸国の大学でも要職に就く理系女子の割合の低い記事が多く載った。因みに、OECD 加盟国 38 国中、自然科学・工学分野で最下位である。この対策として、東京工業大学はじめ、地元の福島大学や会津大学でも女子採用枠・優遇策を打ち出した。それでは男子はどうかと思い、改めて調べてみると男子にしても決して誇れる数値ではなく、世界水準で見ると低率に甘んじている事に変わりはない。換言すると、かつて日本が誇った技術力や科学の基礎・研究力が確実に脆弱になって来ていると思うのだ。逆転の発想になるのだが、理系分野に興味を持ればそれに越した事はない。しかし、先ずは理系教科を得意にする事も手の一つと思う。リケジョ(男子も…)が少ないなら、ここに強みを持つ事は、ある種のプレミアを手に出れる。打算でも良いので是非一考することを勧めたい。何故なら本校は私の教員生活の中で、理数教科(英語も)のレベルが最も高いと思うからである。今稿は、日本の現状を嘆く為に認め^{したた}めるのではない事を^{あらかじ}予め断っておきたい。理系に対するもう一つの側面は文系になるのだろうが、元々私はこの区別を重視して来なかった。なぜなら理系型や文系型の人など居るはずがないと思っているからである。しかし、実社会の情報の多くは一般的な話題なら兎も角^{とかく}、理系の専門領域の話題ともなると理解するにも難易度が上がって来る事が多い。特に医療や科学の先端分野になると、解説者の平易な説明でも、あるラインから先は理解に行き着かない事も多いのではないだろうか。この原因の一つに、矢張り現在の高 2 の時点で理系・文系を分ける事が一因である事は否定できない。つまり数学や物理を履修する生徒が激減するのである。大学レベルの数学・物理までとは言わないが、せめて高校レベルを学べば殆どの新聞記事(理解は兎も角)は、目を通す位は出来るだろう。つまり、高校の理文選択は、極端に言えば人類の共通概念のおよそ半分を捨てる事に成り兼ねない。

(選択は自ずと他方を捨てる事をも意味するのだが…。)



心配を他所に、コロナウイルス感染症のカテゴリーの変更は随所に影響が見られる。例えば、大晦日の定番である紅白歌合戦もその一つだ。最近の楽曲にあまり興味の持てない私でも、海外からのゲストが出演するとなるとこの限りではない。何でもブライアン・メイとロジャー・テイラーが出演するらしい。言うに及ばず伝説の英国のロックバンド、Queen のメンバーの半分である。これは是非聴かなければと思っている。一方、ベートーベンの第九(合唱)も戻って来ていて、様々なオーケストラとソリストの組み合わせで演奏される様だ。良い事だと思いつつも、第九はこの時期の日本の歳時記になった感がある。

2023 年は戦争や異常気象などで、地球上で尊い多くの人命が失われた。Queen の全盛期やベートーベンが生きた時代も、世界は大きな混乱期だったが、それを上回るかも知れない。何はともあれ、これから年末まで、世界の動静、学校の事、自分の事など(特に自分は)反省が多いのだろうが...私なりに振り返ってみようと思っている。